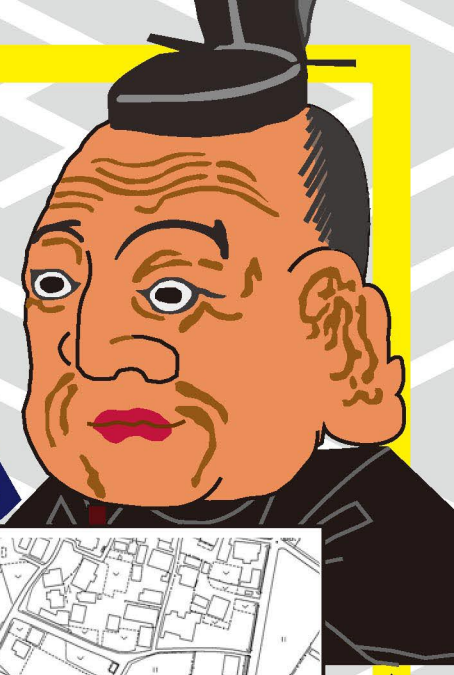
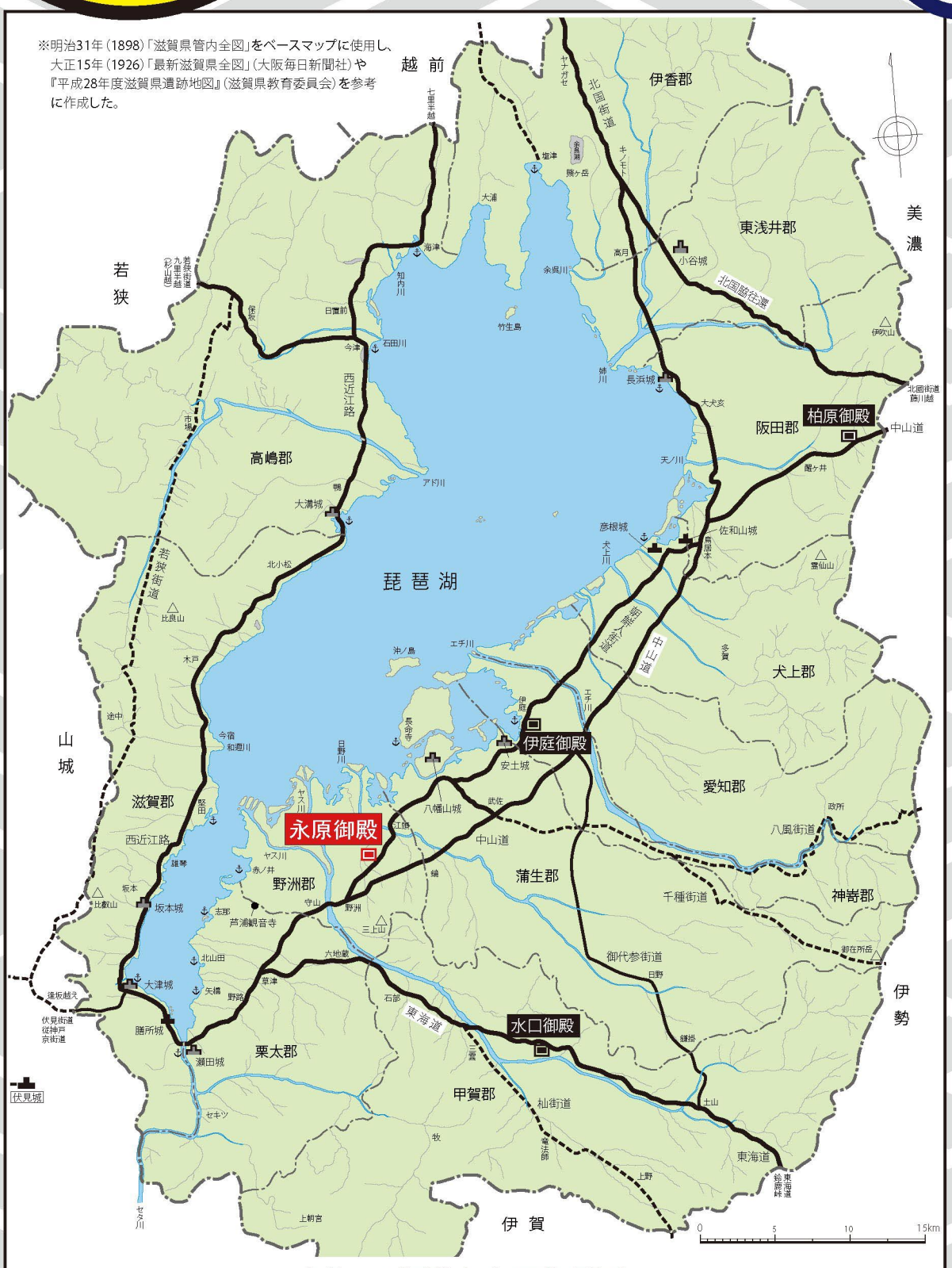
ながはらごてん



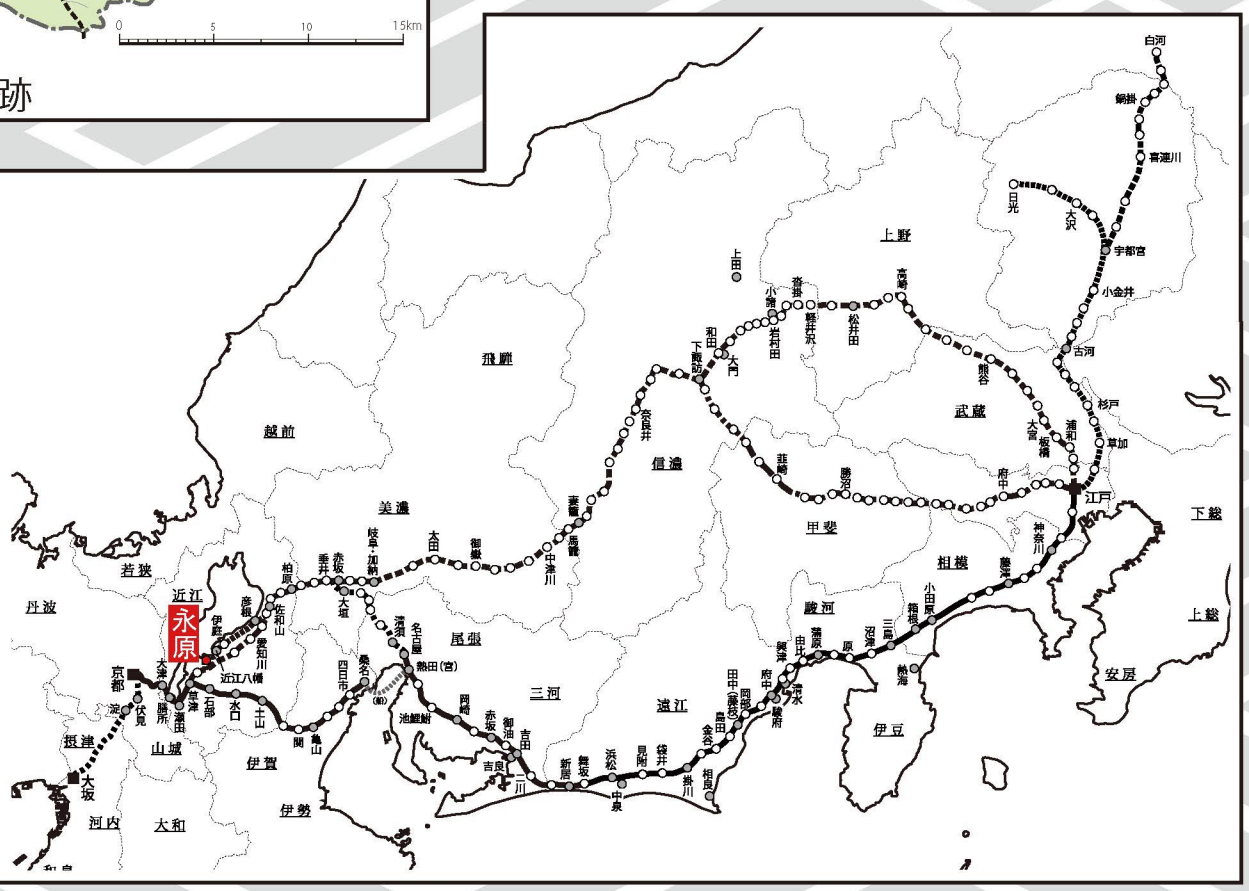
↑とくがわ内府どの



近江の街道と永原御殿跡

永原御殿跡位置図

琵琶湖側の上空から見た永原御殿跡



永原御殿跡は、江戸時代初めに徳川家康・秀忠・家光までの３代の将軍が江戸と京都間の往来に使用した専用の城郭です。

近江では他に東海道沿いの水口城などがあり、江戸までの街道の要所に将軍家専用御殿が築城されました。

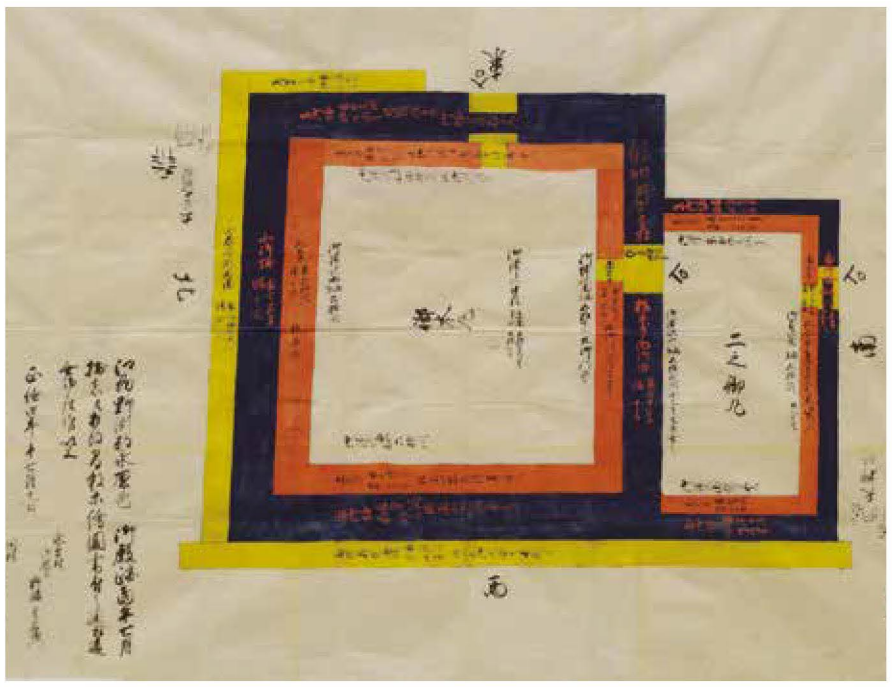
永原御殿の位置

ながはらごてん

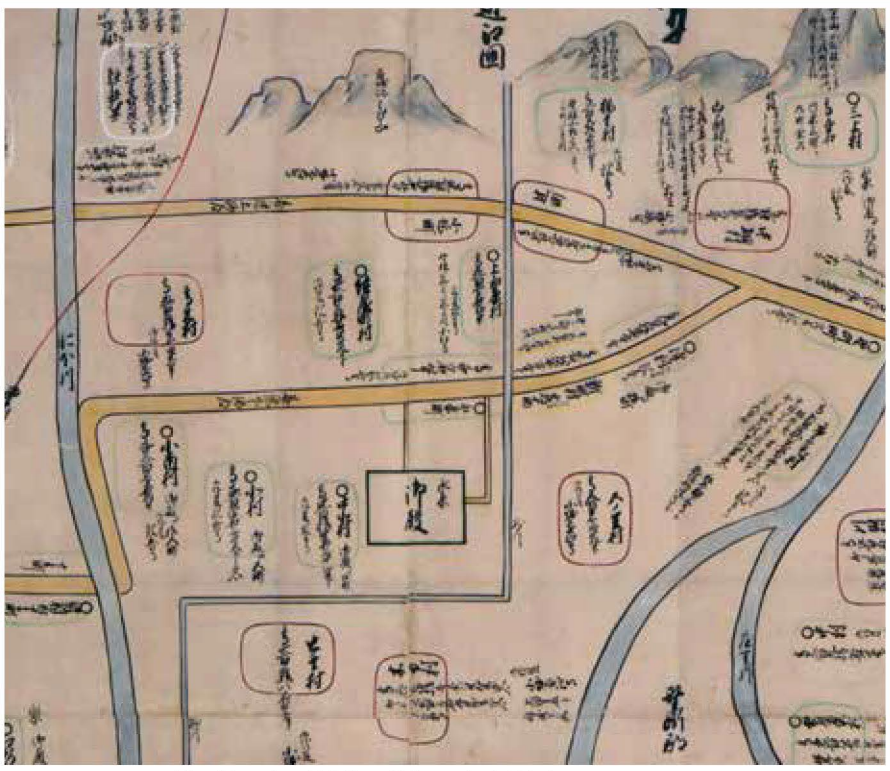
	主なできごと
1591（天正19）	徳川家康が、豊臣秀吉から近江国内に９万石の領地を下されました。その中には野洲郡永原が含まれていました。
1601（慶長６）	関ケ原の戦いに勝利した徳川家康が、江戸へ向かう途中、野洲郡永原で宿泊しました。この頃に初期の永原御殿が整備されたと考えられます。
1605（慶長10）	徳川秀忠が将軍就任のために上洛しました。途中に永原御殿に宿泊し、このときは天候の都合で数日間滞在しました。
1614（慶長19）	徳川家康、秀忠ほか、大坂冬の陣の出陣途中に永原御殿に宿泊しました。
1615（慶長20・元和元）	大坂夏の陣の結果、豊臣家が滅びました。その後の処理を終え、徳川秀忠が江戸に向かう途中に永原御殿に宿泊しました。
1623（元和９）	徳川家光が第３代将軍に就任するにあたり、秀忠と家光が上洛しました。徳川秀忠が江戸へ帰る途中に永原御殿に宿泊しました。
1634（寛永11）	明正天皇の即位を祝賀する目的で、徳川家光が上洛しました。諸大名も合わせて30万の軍勢の上洛となり、永原御殿も大規模に改修されました。家光は上洛のときに永原御殿に宿泊しています。

年未詳「永原村 御殿跡周辺絵図」（永原共有文書）

←とくがわ内府どの



正徳４年（1714）「江州野洲郡永原邑御殿跡絵図」（永原共有文書）



寛永18年（1641）「江州栗太・野洲・蒲生郡之内絵図」（部分；野洲市歴史民俗博物館蔵）

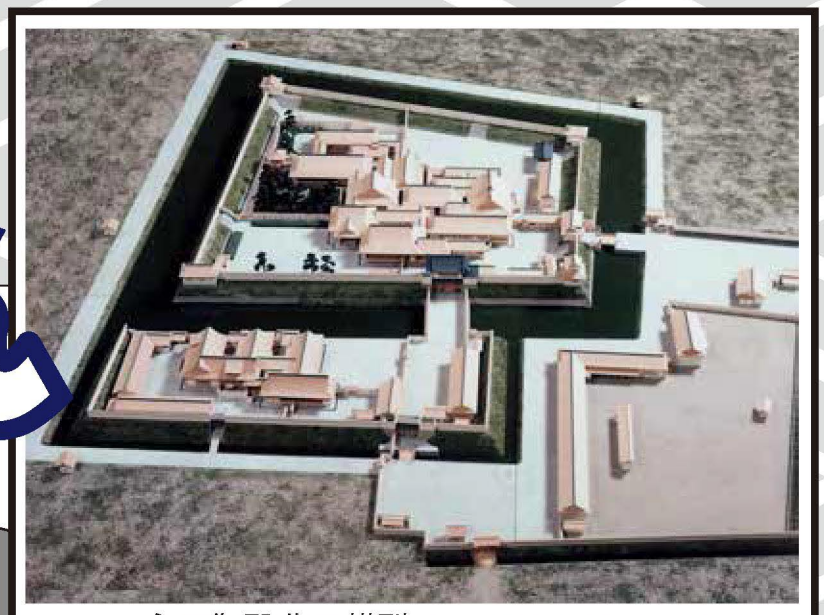
ほぼ中央に四角線で囲まれているところが永原御殿。各村の場所には永原御殿からの距離が書かれています。

徳川家康から秀忠・家光までの３代の将軍の中で、関ケ原の戦いの後、家康は６回、秀忠は４回、家光は２回永原御殿に宿泊しました。

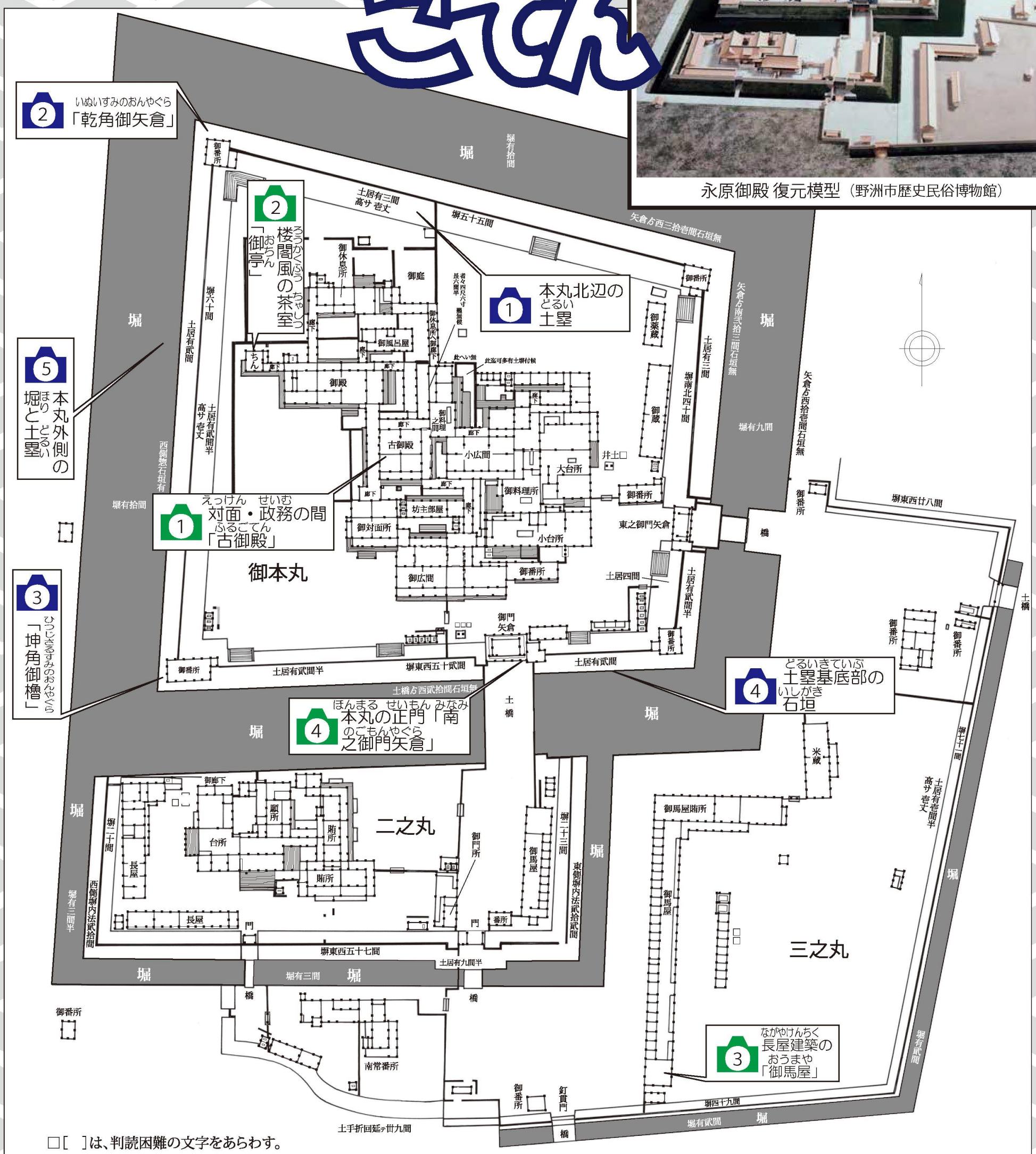
寛永11年（1634）の家光の上洛にあたり、永原御殿は大規模に拡張されました。その後、御殿が利用されることはなく、跡地は永原村の「御殿守」が管理するようになりました。

永原御殿の歴史

ながはらごてん



永原御殿 復元模型（野洲市歴史民俗博物館）



「江州永原御茶屋御指図」（中井家文書）のトレース図

御殿は、寛永11年（1634）に徳川家光が上洛した時に本丸・二の丸が拡張されました。また、この時に三の丸も新たに設置されました。

本丸内の将軍御殿は、「南之御門」から北に向かって、「対面の間」、「将軍政務の間」、「将軍の居間」と、部屋の役割が大きく決められています。

永原御殿の構造

ながはらごてん

←とくがわ内府どの

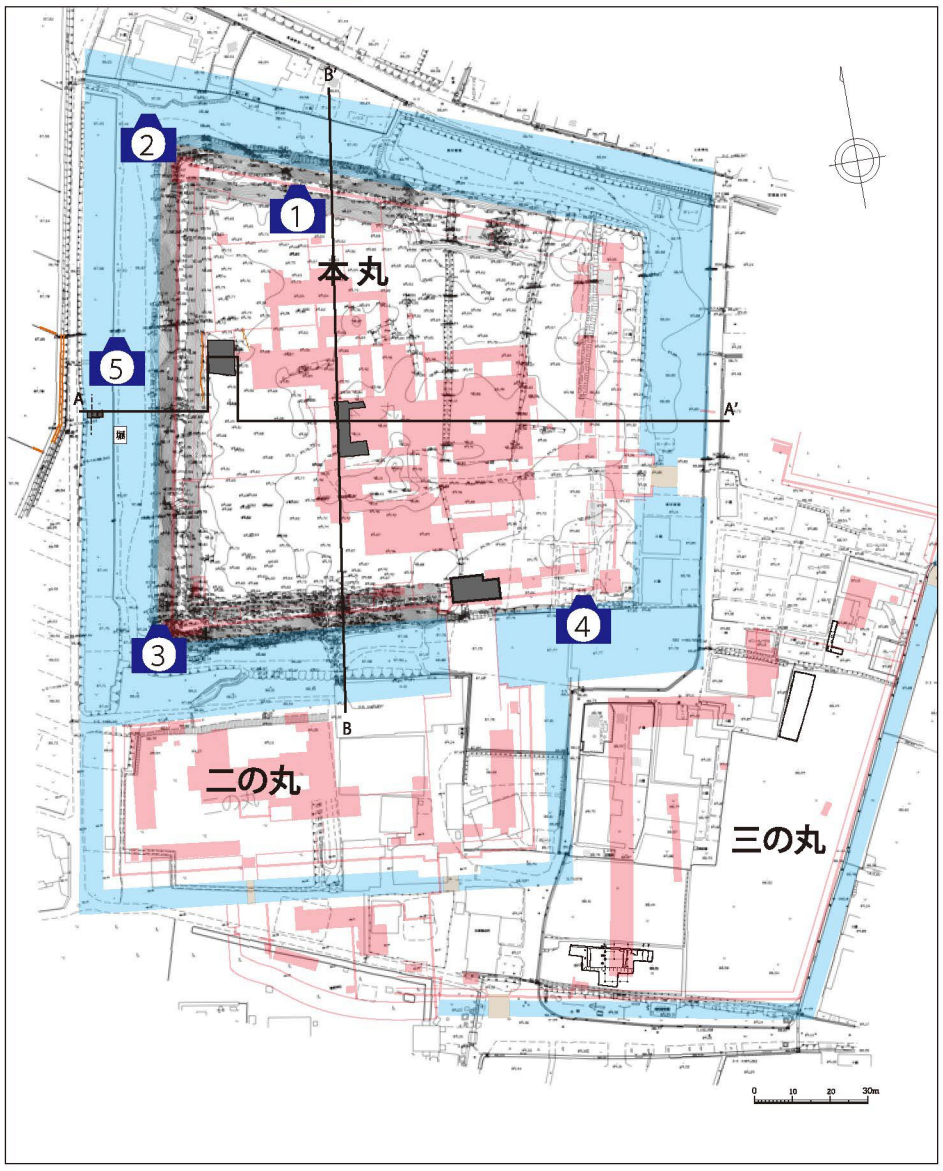
① 本丸北辺の土塁

② 櫓台「乾角御矢倉」

③ 櫓台「坤角御櫓」

▲本丸の周囲を四角形に巡る土塁の角にあたる場所には櫓の建物が建てられました。「櫓」は矢の倉であり、武器や武具の保管場所、あるいは見張りの番所として使われました。

◀本丸の床面から土塁の上まで約３mの高さがあります。

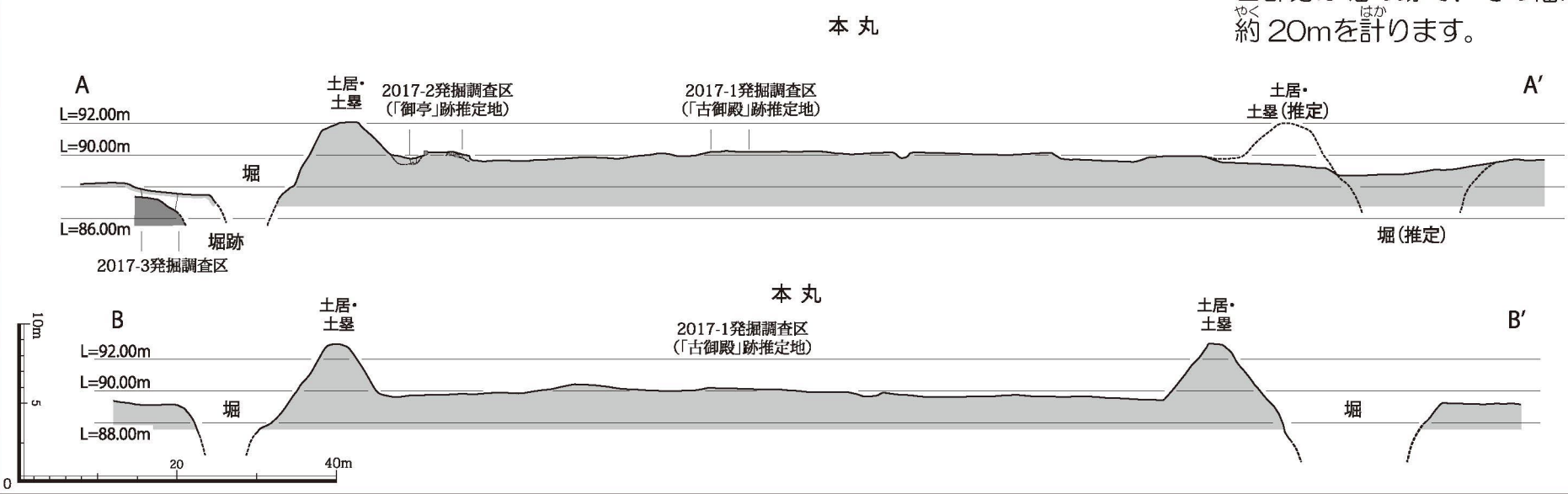


④ 土塁基底部の石垣

▲本丸南東側の堀跡に面した土塁の裾にあたる部分に石垣が残っています。下の大きな石材が当時のものです。
本丸西側にある土塁の外側も、かつては石垣が存在していました。

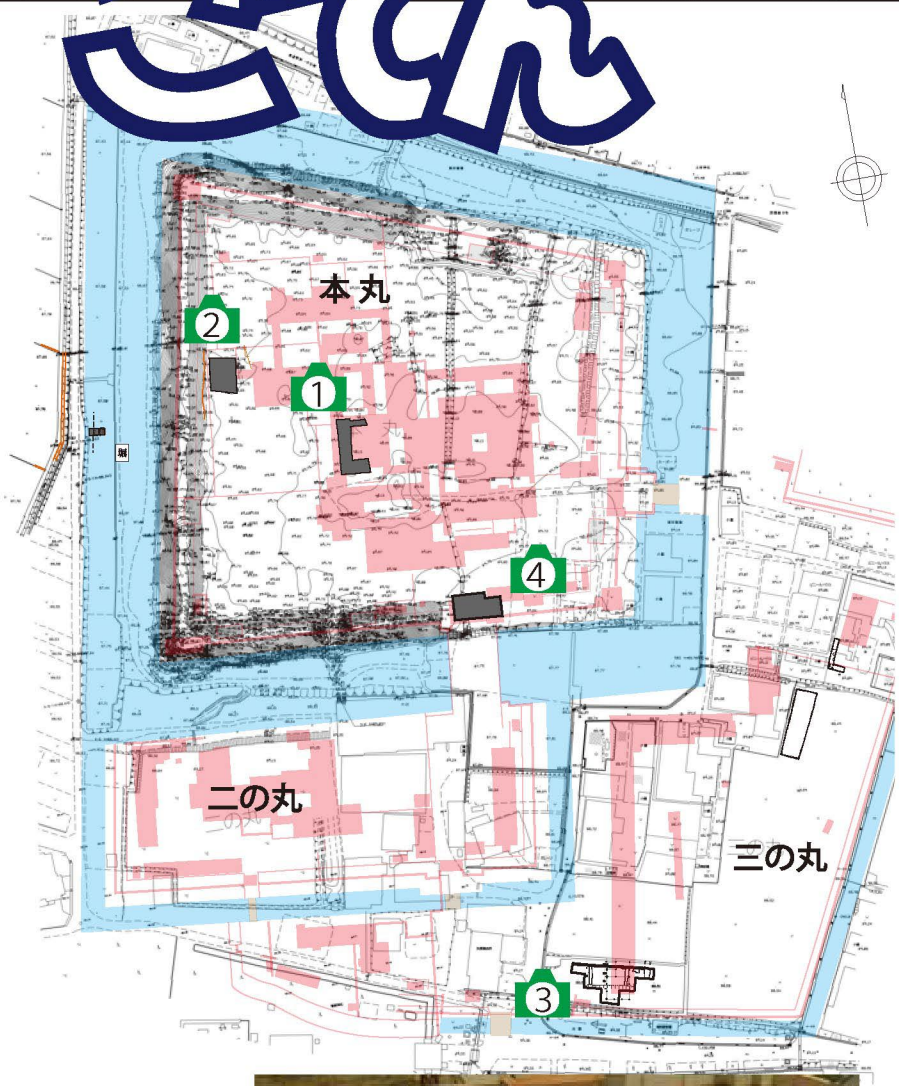
⑤ 本丸土塁と堀跡

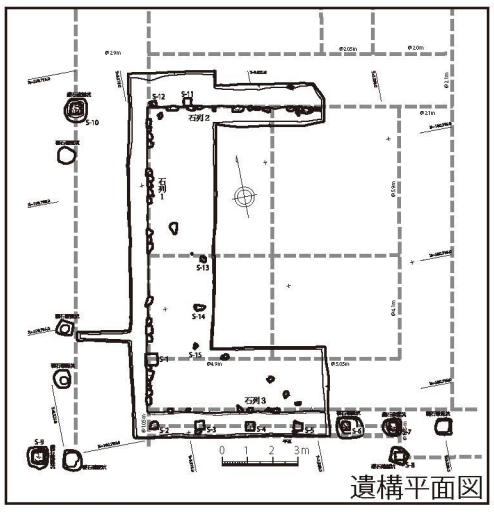
▲本丸の周囲は、一部が埋められていますが、堀の跡が良く残っています。写真の畑と水田部分が堀の跡で、その幅は約 20mを計ります。



永原御殿の遺構

ながはらごてん




遺構平面図

1 「古御殿」の礎石

発掘調査により、建物本体や廊下の柱を据えていた礎石を発見しました。

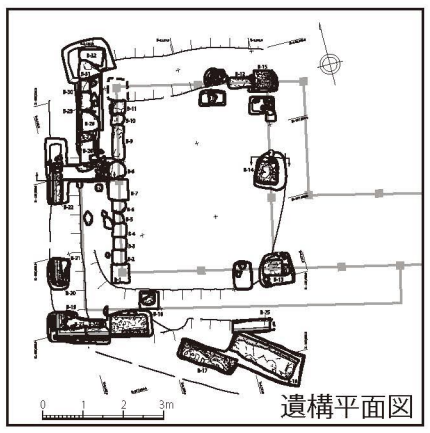
古御殿は、家康の時代に建造されたものが一部改修されて家光の時代にも使用された建物で、将軍との対面の場として使われていました。

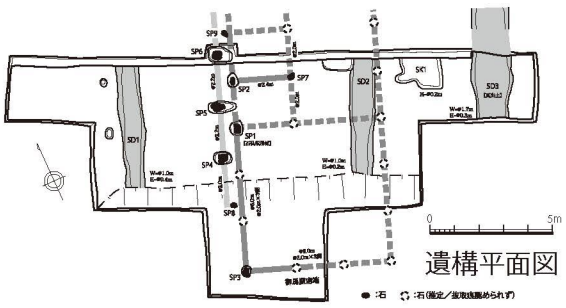
▲復元模型の「古御殿」「御亭」

2 「御亭」の基壇

御亭は、二階建ての建物で将軍が客人をもてなすお茶室と考えられています。

建物の範囲は周囲より高い土壇となり、柱を据えていた礎石の一部が残っていました。


遺構平面図


遺構平面図

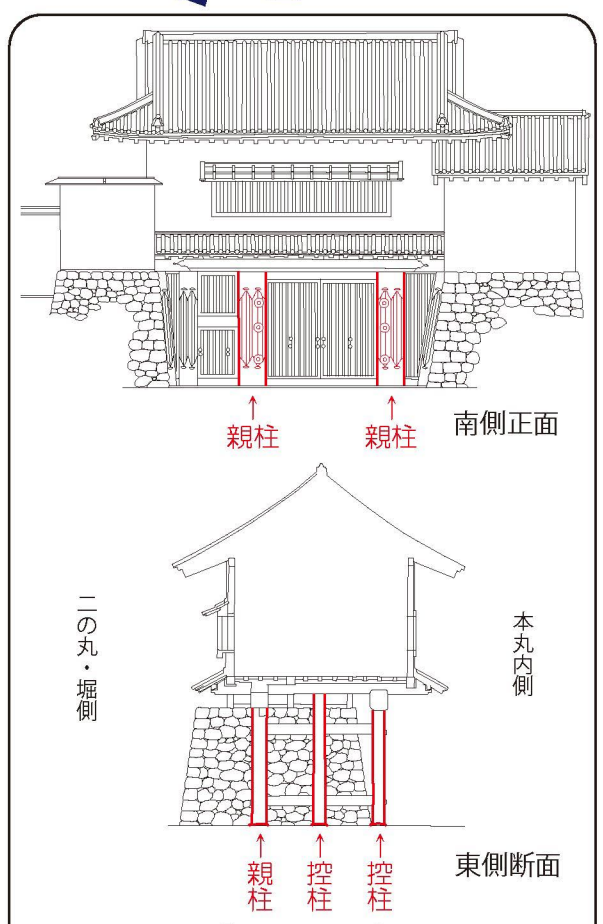
3 三の丸「御馬屋」跡

永原御殿の発掘調査 1

ながはらごてん

④「南之御門矢倉」の柱跡

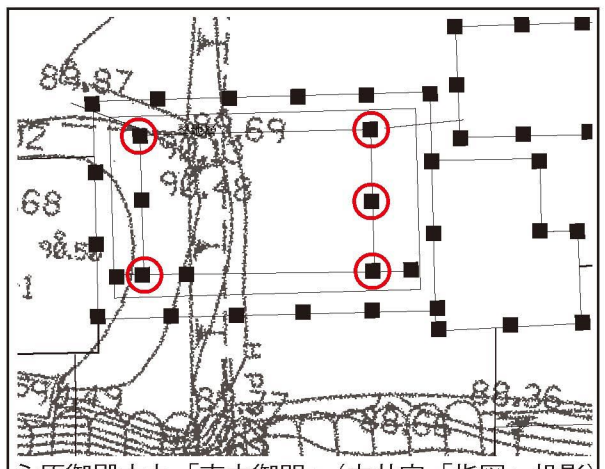
発見した櫓門の柱には大型の礎石が使用され、礎石の下には櫓門全体の重みで柱が沈み込むのを防ぐための「根固め石」が敷かれていました。



永原御殿本丸「南之御門」復元模型立面図

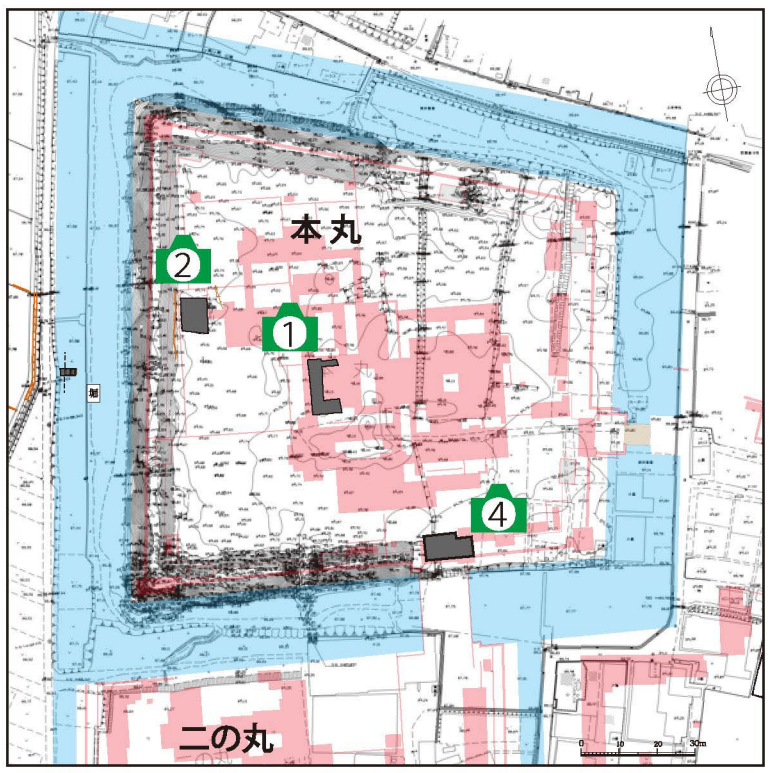
▲櫓門の脇に付属する石垣

▲復元模型の本丸「南之御門」



永原御殿本丸「南之御門」（中井家「指図」投影）
赤丸○は今回の調査で痕跡を確認した柱。

櫓門は、二階建ての構造で、一階部分の出入口の上に櫓を渡す門の形式です。永原御殿の建築図面である「中井家指図」では、「二の丸」と「本丸」は土橋でつながり、本丸の入口部分に「南之御門矢倉」と記されています。

発掘調査では、門のとびらが付く入口の最も太い柱「親柱」や、その奥にある「控柱」の痕跡を発見し、門の両側に付く土塁に築かれていた石垣も確認しました。

本丸正門にあたる「南之御門」は、復元模型のような櫓門であったと考えられます。